

# ノーベル賞の国際政治学

## —ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補—

吉 武 信 彦

### International Politics of the Nobel Prize:

The Nobel Peace Prize and Japan, Japanese Nominees in the First Half of the 1960s

Nobuhiko YOSHITAKE

### 要 旨

第二次世界大戦後、賀川豊彦がノーベル平和賞に1954年、55年、56年、60年の4回、推薦されていたことはすでに紹介した。その賀川に続き、1960年代前半にも日本人が同賞に推薦されていた。1960年の岸信介首相、1963年の仏教哲学者、鈴木大拙である。両名の推薦は、ノルウェー・ノーベル委員会の史料から確認された。岸は、アメリカ上院議員のスペサード・L・ホランドにより核軍縮の唱道者として評価され、推薦されていた。鈴木は、岸本英夫東京大学教授により、禅思想の普及による東洋、西洋間の融和に貢献したとして推薦された。しかし、岸も鈴木も選考では早い段階で落選している。

さらに、吉田茂元首相が1965年のノーベル平和賞に推薦されていたことを示す史料が日本外務省外交史料館で発見された。現時点では、ノルウェー側の史料により確認できないが、高い確率で推薦されたと考えられる。推薦者は、佐藤栄作首相、椎名悦三郎外相らであった。第二次世界大戦後、日本を平和国家として復興させた功績を推薦理由としていた。

1960年代になり、日本人の政治家が推薦者となるばかりでなく、候補者としても推薦され始めた点は、新しい傾向である。

キーワード：岸信介、スペサード・L・ホランド、鈴木大拙、岸本英夫、吉田茂、佐藤栄作、ノーベル平和賞

## Summary

The author already described in the previous paper that Toyohiko Kagawa was nominated for the Nobel Peace Prize in 1954, 1955, 1956 and 1960. Following Kagawa, other Japanese were nominated for the Nobel Peace Prize in the early 1960s; Nobusuke Kishi, former prime minister and Daisetz T. Suzuki, Buddhism philosopher were nominated in 1960 and 1963 respectively. Their nominations were confirmed on the historical papers of the Norwegian Nobel Committee. The former prime minister Kishi was evaluated and nominated by Spessard L. Holland, former United State senator as a key proponent of nuclear disarmament. Suzuki was nominated by Hideo Kishimoto, former professor of the University of Tokyo for his contribution to reconciliation between the East and the West through the dissemination of Zen thought. However, both Kishi and Suzuki were eliminated at the earlier selection.

In addition, a historical paper indicating that Shigeru Yoshida, a former prime minister was also nominated for the Nobel Peace Prize in 1965 was discovered in the Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Although the fact cannot be confirmed on the historical papers of the Norwegian Nobel Committee at this moment, his nomination seems to have been more than likely. According to the paper, he was nominated by Eisaku Sato, former prime minister and Etsusaburo Shiina, former foreign minister for his achievement revitalizing Japan as a peaceful state after the World War II.

It is considered as a new trend since the 1960s that Japanese politicians not only worked as nominator but also were nominated as candidate for the Nobel Prize.

Keywords: Nobusuke Kishi, Spessard L. Holland, Daisetz T. Suzuki, Hideo Kishimoto, Shigeru Yoshida, Eisaku Sato, Nobel Peace Prize

はじめに

### 1 岸信介の推薦

(1) 岸信介の生涯

(2) 推薦状況

(3) ノーベル委員会の評価

### 2 鈴木大拙の推薦

(1) 鈴木大拙の生涯

(2) 推薦状況

(3) ノーベル委員会の評価

3 吉田茂の推薦

(1) 吉田茂の生涯

(2) 吉田の推薦をめぐるこれまでの言説

(3) 推薦状況

おわりに

## はじめに

第二次世界大戦後もノーベル平和賞候補として日本人が推薦される事例が続いた。最初に推薦されたのは、社会事業家、牧師、作家の賀川豊彦であった。彼は1954年、1955年、1956年、1960年の4回、同賞に推薦されていた<sup>1)</sup>。この賀川に続いたのが1960年の岸信介（1896～1987年）、1963年の鈴木大拙（1870～1966年）であった。第二次世界大戦前の推薦から数えると、表1のように国際法学者の有賀長雄（1909年推薦）、実業家の渋沢栄一（1926年、1927年推薦）、上記の賀川に続き、岸が4人目、鈴木が5人目の日本人候補となる。

岸は、1960年当時、首相を務めていた現役政治家であった。この岸の推薦は、日本人政治家がノーベル平和賞に推薦された初めての事例である。岸がノーベル平和賞候補になっていたことは、2012年12月に筆者がノルウェー・ノーベル研究所の史料に基づき初めて紹介した<sup>2)</sup>。しかし、それは事実関係を整理しただけであり、史料などの詳細に触れていない。

鈴木は禅の研究で高名な仏教哲学者、思想家である。宗教という点では賀川と共通する面があるが、鈴木は伝道ではなく、研究、紹介に重点を置いた人物であった。鈴木 of ノーベル平和賞推薦については日本の仏教関係者の間でもほとんど知られておらず、詳細は不明のままであった。

表1 ノーベル平和賞日本人候補者一覧

選考年	候補者	職業・肩書
1909	有賀長雄	国際法学者
1926	渋沢栄一	実業家
1927	渋沢栄一	実業家
1954	賀川豊彦	社会事業家・牧師・作家
1955	賀川豊彦	社会事業家・牧師・作家
1956	賀川豊彦	社会事業家・牧師・作家
1960	賀川豊彦	社会事業家・牧師・作家
1960	岸 信介	首相
1963	鈴木大拙	仏教哲学者

註： 史料の公開されている1963年までを対象としている。

出所：ノーベル研究所史料より、筆者作成。

この岸、鈴木に加えて、政治家、吉田茂（1878～1967年）が1965年にノーベル平和賞に推薦されていたことが確実視される史料が外務省外交史料館で共同通信社により発見され、本年9月、各紙で報道された<sup>3)</sup>。現段階では、これについてノルウェー側史料で裏付けがとれておらず、正式な候補として認定することはできない。しかし、可能性の極めて高い候補として、今後の研究のためにもこれまでの日本側の史料を整理し、状況を把握しておくことは意味があると考えられる。

それゆえ、本稿では現時点で入手できる史料に基づき岸、鈴木、吉田3名のノーベル平和賞推薦を考察する。まず推薦された事実が明白な岸信介、鈴木大拙両名のノーベル平和賞推薦の状況、ノルウェー・ノーベル委員会の評価をノルウェー・ノーベル研究所の史料に基づき明らかにする。誰がいかなる理由から岸、鈴木をノーベル平和賞候補として推薦したのか、またノーベル委員会は両名に対していかなる評価を下したのであるだろうか。次に、吉田茂についても現時点で判明していることを日本側史料で解明する。日本側史料によれば、吉田の推薦はいかなるものであったのであろうか。

## 1 岸信介の推薦

### (1) 岸信介の生涯

まず岸信介のプロフィールを簡単にみておこう<sup>4)</sup>。岸は、1896年11月13日に山口県吉敷郡山口町（現山口市）で生まれた。元々佐藤姓であったが、父の実家、岸家の養子となり、岸姓を名乗った。佐藤栄作は、実弟である。旧制第一高等学校、東京帝国大学を卒業後、1920年に農商務省に入省した（1925年、同省は農林省と商工省に分離し、岸は商工省に所属）。1936年10月には満州国実業部総務司長として満州国に赴任し、すぐに実業部次長になり、翌年には部局の改編で産業部次長となる。1939年10月に帰国し、商工次官に就任する。1941年1月に次官を辞したのち、同年10月には東条英機内閣の商工大臣に就任した。1942年4月には衆議院議員（山口2区）にも当選している。1943年11月には商工省が軍需省に改編されたため（軍需大臣は東条首相が兼任）、軍需次官（国務相）に就任したが、翌年7月に戦争遂行をめぐり東条首相と意見が対立し、軍需次官を辞任している。

以上の経歴から、第二次世界大戦敗戦後の1945年9月、岸はA級戦犯容疑者として逮捕された。しかし、起訴を免れ、1948年12月に巣鴨拘置所から釈放された。1952年4月に公職追放が解け、政治活動を再開する。1953年4月、自由党から衆議院議員に復帰するが、1954年11月に自由党を除名され、日本民主党を結成し、同党幹事長に就任する。1955年11月、保守合同により発足した自由民主党の幹事長に就任した。1956年12月の同党総裁選では石橋湛山に惜敗するが、石橋内閣に外務大臣として入閣した。1957年1月、石橋首相の病気のため臨時首相代理になり、同年2月には正式に岸内閣を発足させた。任期中は、東南アジア諸国を歴訪し、関係改善に努めたほか、日米関係では日米安全保障条約の改定に取り組み、1960年1月、新安保条約に調印した。

しかし、同条約の批准をめぐる日本国内の混乱により、新安保条約の「自然承認」(6月19日)後の同年7月、岸内閣は総辞職した。その後は、1979年まで衆議院議員を務めた。1987年8月7日、90歳で死去している。

## (2) 推薦状況

岸がノーベル平和賞に推薦されたのは、1960年の選考である。表2の通り、推薦者はアメリカ合衆国上院議員のホランド (Spessard L. Holland) であった。同氏からの推薦状 (A 4判用紙1枚) は前年1959年2月13日付けである<sup>5)</sup>。ホランド自身は、ノーベル平和賞推薦の締め切り、2月1日を過ぎていることを認識していたが、できれば1959年の選考に追加してほしいと考え、その旨、推薦状にも記していた。しかし、ノーベル委員会の記録によれば、同委員会が書簡を受け付けたのは同年3月5日であった<sup>6)</sup>。そのため、選考が進んだ段階では岸を組み入れることができず、翌年扱いとして処理されたと考えられる。岸は政治家として初めての日本人候補であった。推薦状が受理された1959年でも、選考対象となった1960年でも、岸は現職首相であった。岸は、1974年にノーベル平和賞を受賞する佐藤栄作元首相の実兄であり、兄弟でノーベル平和賞の選考に登場していたことは興味深い。

推薦者のホランドは、1892年7月にアメリカのフロリダ州ポーク郡で生まれ、フロリダ州選出の上院議員 (民主党所属) として活躍した人物である。岸の推薦状を出した1959年当時も、上院議員の地位にあった。アメリカ議会のデータベース<sup>7)</sup>によれば、彼はエモリー大学、フロリダ大学卒業後、教師、弁護士となる。第一次世界大戦に従軍した後、故郷のフロリダ州ポーク郡で検察官、判事を経験し、1932年～1940年にフロリダ州上院議員となった。1941年～1945年にはフロリダ州知事を1期務めている。第二次世界大戦後は、1946年9月から1971年1月まで同州選出の上院議員となった。議員引退後の1971年11月に故郷のフロリダで亡くなっている<sup>8)</sup>。ホランドと岸とのかかわりについて、現時点では不明である。岸の回想録、インタビュー集にも、ホランドの名前は出てこない<sup>9)</sup>。また、岸の回想録などには自身がノーベル平和賞候補となっていたことを伺わせる記述もない。そのため、岸は自らがノーベル平和賞候補となっていたことを知らなかった可能性が高い。

表2 ノーベル平和賞候補、岸信介、鈴木大拙の推薦者一覧

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付(差出地)
1960	岸 信介	首相	ホランド (Spessard L. Holland)	アメリカ合衆国上院議員 (フロリダ州選出)	1959年2月13日付 (記入なし)
1963	鈴木大拙	仏教哲学者	岸本英夫	東京大学文学部教授	1963年1月23日付 (東京)

註： 肩書は、基本的に推薦状に使われたものを載せた。

出所： Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobel Fredspris* およびノーベル研究所史料より、筆者作成。

ホランドは、推薦状において岸首相を「世界平和の唱道者、使徒」としてノーベル平和賞に推薦している。理由は、岸首相が「堅実に世界中で軍縮と平和を強く唱道し」、「核兵器禁止の実現のために弾みをつけようと努力した」ことを挙げている<sup>10)</sup>。推薦状には、これがわかる年表を添付したとあるが、この年表はノーベル研究所の1960年の推薦状ファイルに存在していない。同研究所によれば、選考委員が選考作業中に他の書類と一緒にしてしまい、紛失した可能性、あるいは推薦状ファイルの他のファイルに紛れている可能性などが考えられる。筆者が1963年までのすべての推薦状ファイルを調査した限り、この年表は紛れていなかった。ホランドが、岸のどの発言に注目し、「軍縮と平和を強く唱道」したと判断したのかは、現時点で不明である。意外な理由といえるかもしれない。また、後に佐藤栄作がノーベル平和賞を受賞した理由の1つに核軍縮をめぐる対応があり、岸と佐藤との間に共通性がある。海外からの日本理解を考える上で「核軍縮」は重要な要素であったことがわかる。

なお、岸とノーベル平和賞との関係は、単に岸が推薦されていたという事実にとどまらない。日本では1950年代前半からノーベル平和賞への関心が強まり、国会議員や学者が外国人の候補を同賞に推薦する事例が多くみられた。たとえば、アメリカの宗教家で「道徳再武装（MRA）」の創始者であったブックマン（Frank N. D. Buchman）は、日本の国会議員らから何度もノーベル平和賞に推薦されていた<sup>11)</sup>。組織的な受賞運動が展開されたと考えられる。しかし、そこには岸の名前を見出すことはできない。戦後、公職追放になった岸が衆議院議員に復帰したのは1953年であるが、それ以後も岸はノーベル平和賞推薦の動きにかかわりをもっていなかった。しかし、1961年、岸は日本人として単独でブックマンをノーベル平和賞に推薦している<sup>12)</sup>。岸は、推薦状の冒頭で、ブックマン博士と「道徳再武装」の活動に深く感謝していることを伝えたいと記したのち、主に2つの点を主張して、ブックマンを平和賞候補に推薦している。第1に、岸はブックマンへの新年のメッセージを引用して、現代世界における「道徳再武装」の重要性を強調している。すなわち、「今日、どの国もたとえ大国でも、自由と信仰への世界大の攻撃に直面して単独では存立できない」と述べた上で、「我々が今最も必要としているのは、攻勢に出て、MRAのイデオロギーを我が政府、我が国民の政策にすることである」としている。第2に、戦後のフィリピンとの関係改善を事例にして、「道徳再武装の精神を通じて我々日本人はアジアの旧敵の多くから信頼を再び獲得することができた」としている。

以上の推薦は、岸がノーベル平和賞の推薦にかかわった初めての事例である。いかなる心境の変化があったのであろうか。岸に対してブックマンの推薦について関係者から何らかの働きかけがあったと考えるのが自然であろう。ブックマンの演説集『世界を再造する』<sup>13)</sup>をみると、首相就任後、岸がブックマンと交流をもっていたのは事実であり、そうした交流の積み重ねの上にブックマンをノーベル平和賞に推薦したのは確かであろう。「道徳再武装」は、冷戦時代の文脈においては、東側陣営に対抗する西側陣営のイデオロギ一的結束を促すものであり、岸の心情と一致するものであった。そのため、岸にとって、ブックマンを推薦することに思想的に違和感はなかつ

たとえられる。

### (3) ノーベル委員会の評価

岸の推薦は、ノーベル委員会の1960年選考においていかなる扱いを受けたのであろうか。1960年は31候補（個人31、団体はなし）が推薦されていた<sup>14)</sup>。ノーベル委員会委員は、このうち8名の候補について関心を示し、さらに検討するため報告書を作成することを決定している。すなわち、報告書を作成した8候補とは、アメリカ人銀行家のブラック（Eugene R. Black）、イタリア人哲学者・国法学者のカンパニョーロ（Umberto Campagnolo）、アメリカ人ジャーナリストのカズンズ（Norman Cousins）、アメリカ人銀行家のイトン（Cyrus S. Eaton）、アメリカ大統領のアイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）、オーストリア人政治家のヘルメール（Oskar Helmer）、インド首相のネルー（Jawaharlal Nehru）、アメリカ人産児制限運動家のサンガー（Margaret Sanger）である。その他、インド人宗教哲学者・副大統領のラダクリシュナン（Sarvepalli Radhakrishnan）は、新しいことがないとして新報告書は作成されなかった<sup>15)</sup>。

以上のように、同年に候補になっていた賀川と同様に、岸も報告書が作成されることはなかった。その結果、1960年の選考において岸はノーベル委員会の関心を惹くことはなく、選考の最初の段階で脱落したと考えられる。

結局、ノーベル委員会は、同年の選考で受賞者の決定を「保留」とし、翌年に持ち越した。1961年の選考では、1960年分として南アフリカの人権活動家、ルトウーリ（Albert John Lutuli）が受賞者に選ばれた。これは、ノーベル平和賞初の非欧米諸国出身者の受賞であった。また、1961年分としてはスウェーデンのハマースホルド（Dag Hjalmar Agne Carl Hammarskjöld）が受賞している。ハマースホルドは、1961年9月にコンゴ動乱の調停活動中にアフリカで搭乗機が墜落し、殉職した国連事務総長であり、ノーベル平和賞としては初めての死後受賞者であった<sup>16)</sup>。

## 2 鈴木大拙の推薦

### (1) 鈴木大拙の生涯

まず鈴木大拙のプロフィールを簡単にまとめておきたい<sup>17)</sup>。鈴木は、1870年10月18日に金沢市で医師の子として生まれた（本名は貞太郎）。6歳の時に、父を病気で失い、一家は経済的に苦勞する。1882年、石川県専門学校付属初等中学科に入学し、後の哲学者、西田幾多郎と同級になる。1888年、第四高等中学校本科に入学したが、経済的理由で中退する。石川県内で小学校高等科の英語教師をした後、1891年に上京し、東京専門学校に入学するが、中退した。この頃より北鎌倉の円覚寺に参禅する。1892年、東京帝国大学文科大学哲学科選科に入学するが、これも1895年に中退した。

鈴木は円覚寺への参禅を続け、1893年にはシカゴ万国宗教会議に出席する釈宗演老師のため

に講演原稿を英訳する。そうした縁により、1894年に釈宗演から「大拙」の居士号を得る。さらに、釈宗演の推薦で1897年に渡米し、イリノイ州ラサールのオープン・コート出版社編集部にも所属する。同地でドイツ出身宗教研究家、ポール・ケーラス (Paul Carus) に協力して、数多くの仏教書の翻訳、執筆を行ない、出版を手伝った。1909年にヨーロッパ経由で帰国し、学習院、東京帝国大学文科大学の英語講師となり、翌年には学習院英語科教授となった。1921年には、真宗大谷大学教授となった。同大学の英文雑誌『イースタン・ブディスト』(*The Eastern Buddhist*) の創刊にかかわり、仏教を海外に紹介した。1936年にはロンドンで開催された世界宗教信仰会議に招かれ、講演を行ない、さらにイギリス、アメリカ各地の大学を訪問し、禅と日本文化などについて講義を行なった。

第二次世界大戦後も、1949年以降、頻繁に渡米、滞在し、コロンビア大学をはじめ各地の大学において精力的に講義、講演を続けた。また、ハワイ大学で開催された東西哲学者会議にも1949年、1959年、1964年の3回出席し、講演を行なった。その他、生涯を通じて、禅、仏教、日本文化について多数の研究書を邦語、英語で刊行し、禅の普及や日本文化の紹介に多大な貢献をした。1949年には文化勲章を受けている。1966年7月12日、東京にて死去した(享年95歳)。

## (2) 推薦状況

以上の鈴木が1963年にノーベル平和賞に推薦されていたのである。この推薦に関して、同時代になされた言及としては、仏教学者の増谷文雄による鈴木紹介の論文がある。該当箇所は以下の通りである。

「……じつは鈴木大拙という思想家の経歴は、あまり人が知っておりませんので、わたしはここに、もっとも的確なる資料をもって、皆さんにそれをご披露をもうしあげてみたいとおもうのであります。……じつは、昨年鈴木先生はノーベル賞候補として日本から出ておったのですが、これはそのときの資料です。わたしも多少それを手伝いましたので、わたしのところにこの資料があるのです。」<sup>18)</sup>

この論文は、雑誌『在家仏教』1966年8月号の鈴木大拙追悼号に掲載されたものであるが、以前の講演を文章化したものである。論文冒頭の本文中に「このお話は、三十九年八月二十四日のもの」との注釈がなされ、さらに論文末尾に「(昭和三十九年八月二十四日、鎌倉円覚寺、夏期講座のお話)」と記されている<sup>19)</sup>。それゆえ、鈴木がノーベル賞候補となった「昨年」とは1963年と断定してよい。なお、ノーベル賞のどの賞に推薦されたかについて増谷論文には言及がなく、詳細は不明であった。

この鈴木大拙の推薦は、1998年に公開された日本外務省文書からも確認できる。すなわち、1963年に鈴木が岸本英夫東京大学教授によりノーベル平和賞に推薦された事実を日本外務省が在ノルウェー日本大使に通知し、その推薦をノーベル委員会が受領したか確認するよう求めた1963年2月12日付け公信案が残っている<sup>20)</sup>。これに対して、在ノルウェー日本大使は、同年2



月21日付け電信で、1月29日にノーベル委員会が受領したことを報告している<sup>21)</sup>。また、同年2月14日付けで、外務省欧亜局長は、岸本教授が鈴木大拙をノーベル平和賞候補として1月23日付けで推薦したことを文部省調査局長に通知している<sup>22)</sup>。

この日本外務省の公開史料に基づき、筆者は2003年2月に上梓した日本・北欧政治関係史に関する拙著において、鈴木ノーベル平和賞推薦の事実のみを紹介した<sup>23)</sup>。

しかし、ノルウェー・ノーベル委員会の史料は50年間非公開のルールがあったため、ノルウェー側の史料で鈴木ノーベル推薦について確認することはできなかった。ようやく2013年に、1963年分の史料がノーベル研究所で公開されたので、事実関係の確認ができるようになった。では、実際の推薦状はいかなるものであったのであろうか。

鈴木をノーベル平和賞に推薦していたのは、上記の情報通り、東京大学教授の岸本英夫であった(表2参照)。推薦状自体は、1963年1月23日付けの極めて詳細なものであり、岸本が多量の時間と手間を使って用意したことがわかるものである。推薦状は、本文A4判タイプ打ち4頁<sup>24)</sup>、さらに資料として鈴木大拙の略伝(A4判タイプ打ち7頁)<sup>25)</sup>、著作リスト(A4判タイプ打ち10頁)<sup>26)</sup>、関連論文2本<sup>27)</sup>からなるものであった。ノーベル委員会による推薦状への書き込みによれば、同委員会は同月29日にこれを受け取っており、前述の外務省情報と一致していた。岸本は、哲学、宗教学の専門家であり、鈴木ノーベル思想についても十分熟知している存在であった。

推薦状の冒頭で、岸本は日本の文部省からノーベル平和賞候補推薦について関心があるか照会を受けたことに触れている。この点については、前述の1963年2月12日付け外務省公信案は、「客年12月、貴任国国会内ノーベル平和賞選衡委員会より本年度平和賞候補推せんに関する回章に接したので、別添(付属1)のごとく関係方面を通じて本件周知方を依頼しおいた」と述べており<sup>28)</sup>、1962年12月に外務省が関係者にノーベル平和賞の推薦を依頼していたことがわかる。その結果、文部省経由で岸本にも推薦依頼が届いたと考えられるが、鈴木ノーベル推薦自体は、岸本自身が考えたのであろう。岸本は、推薦状において鈴木が「文化面の高い功績により、ノーベル平和賞を授与されるに足る東洋の人間であると長年確信してきたので、この機会に平和賞候補として彼を推薦したい」と述べ、鈴木を長年評価してきたことから候補として推薦したことを明らかにしている。

推薦状からは逸れるが、岸本と鈴木とのかかわりは、いかなるものであったのであろうか。両者の接点を示すものが両者の著作に若干見出せる。まず『鈴木大拙全集』の索引によれば、同全集に岸本の名前は2カ所登場する。1つは「老人と小児性」という鈴木ノーベルの遺稿において、近頃亡くなった人として鈴木は岸本の名前も挙げている<sup>29)</sup>。もう1カ所は、鈴木大拙の原稿が岸本らの編集した本に収録されたものであることを示す、編集後記の文献リストである<sup>30)</sup>。このように、出版等を通じて、鈴木は岸本とのかかわりを持ち、その存在を認知していたことがわかる。

他方、岸本は推薦状以前に鈴木について何度も紹介を書いている。まず『鈴木大拙選集追巻第1巻』において、岸本は日本仏教に関する鈴木ノーベルの論考について解説を書いている<sup>31)</sup>。岸本は仏教

などの宗教について造詣が深く、長年、鈴木 of 活躍にも関心を寄せていた。岸本は、アメリカでの鈴木 of 人気を紹介するが、「西洋文化は、まだ東洋文化を知っていない」と述べる。それに続けて、東西文化の接触と交流には懸け橋が必要であり、実際に懸け橋になり得る人として明治以来の90年間を顧みて岡倉天心、新渡戸稲造、姉崎正治を挙げ、その次に鈴木大拙を挙げている。岸本は、鈴木を「二つの文化的伝統を身に備えた人である。真の意味において、二つの文化を比較することができる人である。さらに、言葉をかえていえば、鈴木博士は、日本文化を外から見ることができる。日本文化の中に生きながら、これを、外から見るることができる人である。私は、鈴木博士が、日本思想を語り、日本仏教を説かれるのをきく場合、つねに、この点で、深い感銘をうける。そして、ユニークなものを感じる」と高く評価している。最後に、日本仏教の研究では内と外から眺めてみるのが大切であり、それによってのみ「人類文化一般の中で日本仏教の持つ性格をはつきりさせることができる」と述べ、このような研究ができるのは「二つの文化を一つの心に備えた人間であることが、先決条件となる。その意味から見て、鈴木博士には、日本仏教を取扱う上に、他の人は持つことのできない特別な視角がある」と結論づけている。

また、岸本は1959年にハワイ大学での第3回東西哲学会議に参加したときのことをエッセーにしている。この会議には鈴木大拙が講演者として参加しており、岸本は鈴木 of 講演の様子、1000人を超える聴衆の熱狂的な反応を紹介し、以下のように結んでいる。

「……私の知っている範囲では、日本人の学者で英語で講演をして、このような感激<sup>感銘</sup>を聴衆に与え得る人は、ほかにない。東西文化の交流と、日本文化の紹介のために、鈴木博士がなしとげているこの大きな功績を、日本人はもっと、もっと、深く認識しなければならないのではないか。

この意味で、鈴木博士は、われわれにとって、真にかけがえのない無形文化財である。私はそう考えながら宿舎に向って帰途についたのであった。」<sup>32)</sup>

さらに、岸本は、上記の鈴木 of 講演のエピソードを『鈴木大拙・続禅選集第2巻 禅とは何か』の解説の中でも繰り返し、「……その講演は、千人以上の聴衆に多大の感銘を与えた。そして帰途、聴衆の私語に耳を傾けてみると、アメリカの人たちは、みな、その講演は、首尾一貫、禅の講演であったとして理解していることを知った。それは、鈴木博士が、いかに、禅の東洋文化の中における位置を把握し、東西の文化的なギャップの大きさを心得ておられるかを、物語るものである。私は、ひそかに敬服した次第であった」と記している<sup>33)</sup>。

岸本が鈴木 of 講演のエピソードを繰り返し取り上げているところを見ると、岸本にとってそれがいかに衝撃的なものであったかがわかる。鈴木に対する岸本 of かかる高い評価こそが、鈴木をノーベル平和賞候補に推薦する大きな動機になったのであろう。

では、岸本 of 推薦状を改めてみてみよう。前述のように、岸本はまず冒頭において文部省からノーベル平和賞候補の推薦について関心があるか照会を受けたことに触れた後、鈴木を平和賞候補として推薦している。それに続き、鈴木 of 紹介をしつつ、推薦理由を展開している。推薦状 of

流れに沿って、重要項目を簡単に要約すれば、以下の4点を指摘できるであろう<sup>34)</sup>。

第1に、岸本は、鈴木が国際舞台で傑出した指導者の一人で、東西の文化的理解をこれまで唱道してきたこと、東洋の精神的伝統の思索者、著述家であること、西洋のみならず日本においても特に禅仏教について敬意を集めている仏教研究者であることを指摘している。

第2に、岸本は続けて鈴木の研究する禅の紹介に移っている。禅が元々1つの宗教体系、東洋文化の独特の遺産であり、仏教の全般的傾向から発展してきたものであり、誰が実践しようとも、心の平静を涵養するのを助けるとしている。さらに、禅とその文化は、東洋が西洋を補完しうるものであるとした上で、文学、芸術、茶道、華道などの枝分かれした文化的発展すべてとともに、禅が新しい独自の視角から西洋人の生活を豊かにするものであることを指摘している。それゆえに、近年、禅が西洋社会に持続的に浸透し、知識人をはじめ極めて多くの人たちの関心を惹いてきたとする。

第3に、過去50年、この西洋で起きていることは、ある特定の個人に帰するといっても過言ではないと岸本は述べ、それが鈴木であると断定している。一個人の指導力で、西洋に強い文化的潮流が生み出せるのか、ほとんど信じられないようにみえるが、実際に起こったとする。添付された著作リストに示されるように、鈴木が膨大な本、論文を英語、日本語で執筆し、広く読まれてきたこと、また講演者としてホールを埋め尽くす数百人の聴衆の心を魅了してきたことに触れ、岸本は、彼を「東西間の生きる文化の懸け橋である」と位置づけている。

第4に、岸本は、以下のように禅と世界平和との関係に議論を展開している。「国際平和は、真の文化的理解に基づかなければ、達成できない。真の文化的理解は、知らない外国文化への人々の好奇心を満たすことだけでは決して達成できない。外国の文化的要素が、人々の実際の生活に取り込まれ、生活の不可欠な一部として評価されなければならないのである。禅とそれに付随する東洋文化は、そうしたやり方で西洋社会に導入されてきている。禅に真摯に関心をもつ多くの人々は、心の平和を高める手段としてのみならず、生活の原理としてその生活に取り込んでいる。こうして2つの異なる文化が1つの心の中で出会い、言葉の真の意味で文化間理解をもたらしているのである。西洋における禅の発展は、東洋への深く根差した理解の始まりを示すものであり、静かなやり方ではあるものの、世界平和と直接結びついているのである。」このように、岸本は、禅を通じた東洋、西洋の文化的理解が世界平和に貢献していることを強調したのである。

以上の議論から、岸本は最後に改めて鈴木をノーベル平和賞候補として推薦されるにふさわしい人物として確信していることを明示している。また、鈴木を略伝、著作リスト、鈴木に関する論文を添付したことに触れている。この後、岸本は、さらに情報や参照のために役立つ人名リストを推薦状の末尾に付けている。人名リストには鈴木をよく知る13名の外国人と3名の日本人が列挙されている。たとえば、外国人の中には、社会学者・精神分析学者のフロム (Erich Fromm)、インド大統領のラダクリシュナン、在日アメリカ大使のライシャワー (Edwin O. Reischauer)、歴史家のトインビー (Arnold Toynbee) がいる。日本人3名は、三笠宮崇仁親王、

吉田茂元首相、湯川秀樹京都大学教授である。

推薦状に添付された資料のうち、鈴木 の 略 伝 は、1870年 の 誕 生 か ら 1962年 ま で を 扱 い、鈴木 の 主 な 経 歴 を 示 す と と も に、数 多 くの 海 外 訪 問 を 記 録 し、同 時 に 主 要 著 作 の 出 版 も 網 羅 し て いる<sup>35)</sup>。鈴木 の 豊 富 な 国 際 的 活 躍、精 力 的 な 著 作 活 動 が わ か る も の で あ る。著 作 は、著 作 リ ス ト に お い て 改 め て よ り 詳 し く 年 代 順 に 列 挙 さ れ て いる<sup>36)</sup>。英 語、日 本 語 の 著 作 が 125冊 あ る。日 本 語 の 著 作 に つ い て は、す べ て タ イ ト ル に 英 訳 が つ け ら れ て いる。ま た、そ の 後、フ ラ ン ス 語、ド イ ツ 語、ポ ル ト ガ ル 語 に 翻 訳 さ れ た 著 作 に つ い て は、そ の 文 献 情 報 も 併 記 さ れ て いる。そ の 他、推 薦 状 に は 外 国 人 2名 に よ る 鈴木 紹 介 の 論 文 も 参 考 資 料 と し て つ け ら れ て いた<sup>37)</sup>。ヨ ー ロ ッ パ と ア メ リ カ に お け る 鈴木 の 評 価 が わ か る も の で あ っ た。

以 上 の よ う に、岸 本 は 文 部 省 の 依 頼 か ら 短 期 間 の う ち に 詳 細 な 推 薦 状 を 作 成 し、ノ ー ベ ル 委 員 会 に 提 出 し た の で あ る。1963年 当 時、す で に『鈴木 大 拙 選 集』、『鈴木 大 拙 禅 選 集』な どの 著 作 集 が 出 る な ど、鈴木 の 業 績 を 概 観 す る 文 献 も 現 れ て いた が、鈴木 の 長 い 経 歴 を ま と め、詳 細 な 文 献 リ ス ト を 作 り、さ ら に 鈴木 の 禅 研 究 の 国 際 的 意 義 に 言 及 し た 推 薦 状 を 執 筆 す る こ と は 短 期 間 の 作 業 と し て 大 変 な も の で あ っ た と 考 え ら れ る。岸 本 は、ア メ リ カ 留 学 を 経 験 し、英 語 に 堪 能 で あ り、同 時 に 国 内 外 の 哲 学、宗 教 に も 造 詣 が 深 く、鈴木 を よ く 知 る 人 物 で も あ っ た。岸 本 は、鈴木 を ノ ー ベ ル 平 和 賞 に 推 薦 す る 上 で ま さ に 適 任 で あ っ た と 考 え ら れ る。

### (3) ノーベル委員会の評価

1963年 には 51候 補 (個 人 42、団 体 9) が ノ ー ベ ル 平 和 賞 に 推 薦 さ れ て いた<sup>38)</sup>。そ れ ま で の 年 に 比 べ る と、候 補 数 が 多 く、さ ら に 一 部 候 補 に つ い て は 精 力 的 な 推 薦 キ ャ ン ペ ー ン が 行 な わ れ た と み ら れ、推 薦 者 の 数 も 極 め て 多 か っ た。特 に、推 薦 者 の 多 か っ た 候 補 は、オ ー ス ト リ ア 人 慈 善 家 の グ マ イ ナ ー (Hermann Gmeiner)、イ ギ リ ス 人 哲 学 者・平 和 運 動 家 の ラ ッ セ ル (Bertrand Russell)、世 界 エ ス ペ ラ ン ト 協 会 で あ っ た。ノ ー ベ ル 委 員 会 の 選 考 で は、51候 補 の う ち、14候 補 に つ い て 報 告 書 が 作 成 さ れ た。そ の 中 に 鈴木 の 名 前 は な か っ た。鈴木 は、ノ ー ベ ル 委 員 会 の 選 考 に お い て 早 期 に 脱 落 し た と 考 え ら れ る。

報 告 書 が 作 成 さ れ た の は、以 下 の 候 補 で あ る。イ ス ラ エ ル 人 哲 学 者 の ブ ー バ ー (Martin Buber)、ブ ラ ジ ル 人 産 業 家 の カ ス ト ロ (Josué de Castro)、ア メ リ カ 人 銀 行 家 の イ ー ト ン、ア メ リ カ 人 慈 善 家 の ガ ラ ッ テ ィ (Stephen Galatti)、グ マ イ ナ ー、ア メ リ カ 人 財 政 家 の ホ フ マ ン (Paul Gray Hoffman)、ア メ リ カ 人 伝 道 者 の ジ ョ ー ン ズ (E. Stanley Jones)、ア メ リ カ 人 化 学 者 の ポ ー リ ン グ (Linus Pauling)、ラ ッ セ ル、ド イ ツ 出 身 作 家 の ウ ン ル ー (Fritz von Unruh)、赤 十 字 国 際 委 員 会、パ グ ウ ォ ッ シ ュ 委 員 会、赤 十 字 社 連 盟、U N I C E F (国 連 児 童 基 金) で あ る。以 前 に も 候 補 に な っ て いた イ ン ド 人 哲 学 者 の バ ー ヴ ェ ー (Vinoba Bhave)、イ ギ リ ス 人 政 治 家 の ブ ロ ッ ク ウ ェ イ (Fenner Brockway)、国 際 法 律 家 委 員 会 に つ い て は、追 加 す べ き 新 し い こ と が な い と し て、さ ら な る 調 査 は 行 な わ れ な か っ た<sup>39)</sup>。

1963年のノーベル平和賞の選考は、最終的に以下の結果となった。該当者がなく、保留となっていた1962年分はポーリングに与えられ、1963年分は赤十字国際委員会と赤十字社連盟に与えられた。ポーリングは、核軍縮を提唱する平和運動家としても知られ、1954年のノーベル化学賞に続くノーベル賞受賞者となった。赤十字国際委員会と赤十字社連盟については、1963年は赤十字国際委員会の創立100周年の記念の年であり、長年の国際的人道活動が評価された。赤十字国際委員会は1917年、1944年に続く3度目の受賞であった。

### 3 吉田茂の推薦

#### (1) 吉田茂の生涯

まず吉田茂の経歴をみておこう<sup>40)</sup>。吉田茂は、1878年9月22日に高知の自由民権家、竹内綱の5男として東京で生まれている。1881年、横浜で実業家として活躍していた吉田健三の養子となり、吉田姓となる。学習院中等学科、高等学科を経て、学習院大学科に進学するが、大学科の廃止に伴い、1904年東京帝国大学法科大学政治科に編入した。1906年に同大学を卒業後、外務省に入省した。中国奉天総領事館領事官補（1907年）を手始めに、在イギリス大使館、在イタリア大使館を経て、安東領事、済南領事などのポストを歴任した。1909年、枢密顧問官牧野伸顕の長女、雪子と結婚している。1919年のパリ講和会議には、牧野伸顕全権大使に随行して、代表団の一員となった。第一次世界大戦後は、在イギリス大使館一等書記官、天津総領事、奉天総領事を経て、1928年には田中義一内閣で外務次官になる。1930年には在イタリア大使に任命された。1936年に在イギリス大使に任命され、1939年に退官する。第二次世界大戦末期には、近衛文磨らと和平工作を行ない、その自由主義思想もあり、1945年4月、憲兵隊に検挙、拘置された。

第二次世界大戦後は、戦中に政府、軍部と距離を置いたことが評価され、1945年9月に東久邇稔彦内閣の外務大臣に就任し、同年10月の幣原喜重郎内閣でも留任した。同年12月、貴族院議員となる。鳩山一郎の公職追放により、1946年5月には自由党の総裁となり、同月、第1次吉田内閣を組閣した。このとき、新憲法の公布、施行がなされた。1947年4月の総選挙で高知全県区から衆議院議員に当選したが、自由党は敗れ下野した。1948年10月に第2次内閣、1949年2月に第3次内閣を組閣した。1951年9月のサンフランシスコ講和会議に首席全権として出席し、サンフランシスコ平和条約に調印した。同日、吉田は日米安全保障条約にも調印している。1952年10月に第4次内閣、1953年5月に第5次内閣を組閣した。1954年4月、佐藤栄作幹事長が造船疑獄で取り調べを受けるが、法相が指揮権を発動し、佐藤幹事長への逮捕請求を退けた。野党、さらに政府与党内からも批判が続出し、内閣は1954年12月総辞職した。

首相引退後も、吉田は衆議院議員を続け、神奈川県大磯の邸宅を拠点に政界に影響力を残すことになった。「吉田学校」と称されたように多くの政治家を育てた結果、弟子にあたる佐藤栄作、池田勇人らが活躍し、彼らをはじめ多くの政治家が大磯の吉田邸を訪問した。また、外国からの

賓客も吉田に面会するため、大磯を訪問した。1963年10月の衆議院解散に際して、吉田は立候補をせず、政界から引退した。1967年10月20日、大磯にて死去した（享年89歳）。同年10月31日には、武道館にて国葬が執り行なわれた。

## （２）吉田の推薦をめぐるこれまでの言説

次に吉田茂のノーベル平和賞推薦を検討したい。吉田がノーベル平和賞に推薦されていたことは、関係者の証言から1970年代以来知られていた。特に、1974年に佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞した際に、そのための受賞仕事を担当した関係者や佐藤自身の発言から、吉田の推薦が推測されたのである。では、具体的にその発言をみてみよう。

まず挙げられるのは、佐藤のノーベル平和賞受賞を工作した元外交官の加瀬俊一、加瀬に指示を与え、全面的な資金提供をした鹿島守之助鹿島建設会長である。加瀬は、佐藤の受賞が決まった直後の1974年10月から受賞工作の経緯を記者会見、雑誌のインタビューにおいて明らかにしている。その中で、加瀬は、以下のように述べ、佐藤へのノーベル賞受賞工作以前に吉田への受賞運動があったことを明らかにしている。

「もう新聞や雑誌にも少し出ているようですが、日本はかつて故吉田元総理がもらったらどうだろうということで、三回ほど試みたわけですね。私、初めの二回はあまり積極的には参加しませんでした、三回目はかなりほかの方と一緒に、実務に当たりました。

そして、その三回目は吉田さんがもらえそうだというように、日本側は考えたわけですね。しかしこれは希望的観測で、実際はどうだったかわかりません。ともかく受賞の発表は毎年十月の半ばにあるわけですが、その寸前に吉田さんがなくなってしまって、その年は該当者なしだった。そうなるとわれわれはいよいよ吉田さんがご存命だったら、もらえたんじゃないかという気持ちになるでしょう。（笑）しかしこれは実際にはわかりません。」<sup>41)</sup>

鹿島守之助に関しても、彼の死（1975年12月3日）後に出された伝記本において次のような指摘がみられる。

「かねて彼〔鹿島守之助——筆者〕はこのような日本にとって、従来のようにただ単に世界から経済大国としてだけ評価されているのではなく、さらに平和国家、文化国家としても承認されることにより、そのイメージ・アップを図らねばならないと考えていた。

たまたまさきに日本では、故吉田元総理をノーベル平和賞候補に推薦する運動が行なわれ、この運動は三回続けられていよいよ受賞が内定しようとした直前、吉田氏が亡くなったということがあり、その後彼も日本のイメージ・アップのために、日本におけるノーベル平和賞候補の推薦運動を働きかけることにした。

そこで彼は自分の主宰する鹿島平和研究所の理事会に諮って、一九七二年（昭和四十七年）に鳩山薫元総理夫人をその候補に推薦し、これは不成功に終わったが、ついで七四年に佐藤元総理を推薦し、これはただ一回だけで見事にその目的を果たすことができたのである。」<sup>42)</sup>

同様の指摘は、ノーベル平和賞を受賞した佐藤栄作元首相によってもなされていた。佐藤は、鹿島守之助が会長を務める鹿島平和研究所の第7回鹿島平和賞を1975年2月17日に授与された。その際の佐藤の謝辞に以下の文言がある。

「古い話は別にいたしまして、近くの問題からみましても、ノーベル平和賞に値される方が私どもの先輩にもあったとっております。私は非常に残念に思いますのは、私の師匠であられる吉田先生が、今しばらく長生きをされたなら、これは必ず受賞された方ではないだろうか、かように思っております。

また、いろいろ伺ってみると、鹿島平和財団でも吉田先生を推薦されたと。しかし、亡くなられた。亡くなった方にさしあげる平和賞ではないと、かような話も聞きます。国連のハマーショルドさんだけは亡くなられてからもらった。その他はみんなご存命中にももらった。そういうことであります。そのことを考えると、たいへん残念であると、かように思います。」<sup>43)</sup> その他、吉田の推薦に際して、ハーバード大学教授のライシャワーが推薦状を書いたとの証言もある<sup>44)</sup>。

以上のように、吉田のノーベル平和賞推薦に関しては、吉田が亡くなった1967年とそれに遡る2年の計3回、推薦されていたとの事実のみが知られていたのである。

その後、1991年に吉田のノーベル平和賞推薦に関して極めて詳細な経緯が明らかにされた。財団法人吉田茂記念事業財団は、1984年に人間吉田茂の側面を描いた外伝『人間 吉田茂』の出版を企画し、1991年に出版した。それは、吉田の近親者、親しく接した関係者の回想をまとめたものであった。その中に、1963年から67年まで吉田の世話係となり、外務省とのパイプ役を務めた御巫清尚<sup>みかなぎきよひさ</sup><sup>45)</sup>の回想もあり、晩年の吉田茂の様子が詳細に記されている。その1節で吉田のノーベル平和賞推薦運動が明らかにされている<sup>46)</sup>。それによれば、3回の推薦の概要は以下の通りである。

#### ① 1965年

1965年に吉田の周辺や外務省幹部の間で吉田のノーベル平和賞推薦の働きかけが始まり、「三月始めに」<sup>47)</sup>内海丁三<sup>48)</sup>に推薦文の起草を依頼したが、結局、同年のノーベル平和賞はUNICEF（国連児童基金）に決まった。

#### ② 1966年

1966年は、「より力を入れて運動を進めることが関係者の中で確認され」、同年1月17日に下田武三外務次官が田中耕太郎、横田喜三郎、高柳賢三、江川英文、栗山茂の推薦有資格者を招いて運動の進め方を協議した。推薦状は、この年も内海丁三に依頼された。さらにこの年は、『マンチェスター・ガーディアン』紙の駐日特派員、ティルトマン（Hubert Hessel Tiltman）の助言により、吉田の活動についての論文が用意された。まず論文の草稿を高坂正堯京都大学助教授が作成し<sup>49)</sup>、吉田の了承を得て、外務省の赤谷源一が英訳、さらにティルトマンが校閲した。同年8月に原稿がブリタニカ社に引き渡され、これが吉田執筆の論文として1967年版『ブリタニ

力年鑑』の巻頭を飾ることになった<sup>50)</sup>。ただし、これについて御巫は「ノーベル委員会にはどれほど効果があったか分からない」と述べている。その他、ノルウェーに赴任する新大使<sup>51)</sup>に尽力を依頼したり、三谷隆信前侍従長にノルウェーに立ち寄って運動をしてもらっている。しかし、「この年も受賞に至らず関係者一同を落胆させた」のであった。

### ③ 1967年

1967年も前年と同じ手順で1月に次官が推薦有資格者を集めて協議し、推薦文を書いてもらった。7月頃になって取りまとめ役の栗山茂が次官に対し、「今年を最後と思って努力しようとしたが、十月吉田氏が逝去して本当に最後となってしまった」とある。

以上の御巫の証言により、吉田の推薦活動の概要が明らかになった。活動の担い手になった外務省関係者の氏名、具体的日付、さらに運動の実態も判明したのである。御巫の回想は、ノーベル平和賞推薦に限らず極めて詳細であり、日記などの当時の記録を基に執筆されたと考えられる。この証言を読む限り、外務省では下田武三外務事務次官がまとめ役を務めたと考えられる<sup>52)</sup>。

この御巫の証言以後、吉田に関する研究では、これに基づいて吉田のノーベル平和賞推薦について言及するものも現れた。たとえば、ノンフィクション作家の保阪正康は、この推薦運動を紹介した上で、批判的にみている。

「……この運動に関わった外務官僚は、ふたつの意味をもって熱心になったのだろうとは容易に想像されるところだ。ひとつは、吉田への忠勤を露にすることで外務省の主流人脈をつくりあげようとの意図、そしてもうひとつは、吉田路線を国際社会で認知させることによって、戦後日本の外交路線が正道を歩んだとの自己確認であった。

だがこの獵官運動は、実際には国際社会でそれほど真面目に相手にされなかったというのが真相である。私の知る限り、吉田の名はアメリカ外交の追認者であり、軍国主義日本を平和日本に変えたという評価は国際的に通用しないとの論が、当時の欧米の有力紙の論調だったからである。」<sup>53)</sup>

さらに、保阪は、この運動に対する吉田の態度を推し測り、吉田が真面目に期待していたならば、「単なる功名心にあふれた政治家だったと告白するに等しい」と述べ、「後世に自らの存在を近代日本の中心軸に位置づけてもらいたいとの意思があり、それをノーベル平和賞の威力を借りて満たそうとするなら、吉田はすでに錯覚のなかに身を置いていたといえるだろう」とも指摘している。さらに、「やむなく協力したとすれば、晩年の吉田周辺はひいきの引き倒しにも似た独自の空間をつくりあげていたことにもなる」としている<sup>54)</sup>。

以上のように、1960年代中葉に吉田がノーベル平和賞に推薦されていたことは、広く知られていたのである。

### (3) 推薦状況

2014年9月、共同通信社が吉田の1965年ノーベル平和賞推薦に関する記事を配信し、各紙で



報道された。これは、外務省外交史料館のファイルに所蔵されていた1965年ノーベル平和賞推薦状が発見されたことを受けたものであった。本稿では、記事の基になった外務省外交史料館にあった推薦状に基づき、吉田のノーベル平和賞推薦の実態を紹介したい。なお、1965年のノーベル平和賞の選考については、ノーベル研究所はまだ史料を公開していない。そのため、本稿の分析は吉田のノーベル平和賞推薦について日本側史料から現時点でわかることに限定される。

吉田の推薦状が見つかったファイルは、1950年代から60年代にかけて外務省が扱ったノーベル賞関係の資料をまとめた『ノーベル賞関係雑件』である。吉田関連のものとして、以下の6点があった。

- ① 1965年1月26日付け推薦状（英文、タイプ打ち3頁）<sup>55)</sup>。
- ② 経歴書（英文、タイプ打ち1頁）<sup>56)</sup>。
- ③ 推薦理由書（英文、タイプ打ち2頁）<sup>57)</sup>。
- ④ 1964年12月10日のノーベル平和賞授賞式におけるヤーン（Gunnar Jahn）ノーベル委員会委員長によるキング（Martin Luther King, Jr.）牧師への授与演説（英文、タイプ打ち6頁）<sup>58)</sup>。
- ⑤ サンフランシスコ講和会議議事録における1951年9月7日の吉田演説の抜き刷り（英文、タイプ打ち7頁）<sup>59)</sup>。
- ⑥ 吉田の政治活動についての評伝（英文、タイプ打ち24頁）<sup>60)</sup>。

これらの文書は、外務省ファイルに体系づけられて収録されていない。そのため、実際に吉田のノーベル平和賞推薦がなされたとしても、現時点ではどの文書がノーベル委員会に実際に送付されたかは不明である。最終的にはノルウェー側の史料公開を待たなければ、事実関係はわからない。しかし、内容から判断して、①の推薦状に加えて、②、③、⑥の文書が参考資料として送付された可能性がある。また、⑤についても可能性はあろう。

では、個々の史料の内容を整理しつつ、吉田の推薦がいかなるものであったのか、検討したい。まず、①であるが、日付、内容から判断して、これが1965年時の推薦状と考えられる。同文書は、1965年1月26日付けで、ノーベル委員会委員長宛てである。まず吉田を1965年ノーベル平和賞候補として推薦すると述べた後、吉田の経歴を簡潔に記している。吉田が太平洋戦争を防止しようとしたが無駄に終わり、その後平和を回復しようと全力を尽くしたこと、軍閥の力が支配的な当時としては多大な勇気と不屈の精神を要したこと、7週間も投獄されたことに触れている。戦後には外相、首相として7年間、戦争放棄の新憲法の制定を含む様々な政府機構の改革を行ない、さらにサンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約を締結したことを通して、平和、自由、民主主義の新生日本を生み出したとしている。今日、日本がアジアの平和と繁栄のために死活的役割を演じ、世界全体の安寧に貢献しているとも述べている。「吉田が新生日本の創設の父であるといっても、誇張ではない」とも指摘し、その傑出した活動が認められて、この国の最高の勲章である大勲位菊花大綬章を授与されたことにも触れている。最後に、「吉田の世界平和追求の多大な努力と業績により、1965年ノーベル平和賞受賞者として十分資格があると確信し、ここ

に関連書類とともにこの推薦状を提出する」と結んでいる。

この推薦状の署名欄には以下の4名の名前と肩書がタイプ打ちされていた。佐藤栄作首相、椎名悦三郎外相、さらに横田喜三郎最高裁判所長官・万国国際法学会会員、栗山茂ハーグ国際仲裁裁判所判事・国際法協会会長（署名順）。推薦状に署名自体はなく、これは推薦状の写しと考えられる。横田、栗山は、前述の御巫証言にも登場する人物である<sup>61)</sup>。

推薦状は、比較的簡単なながらもポイントを押さえたものといえよう。第1に、吉田が戦前の軍国主義とは距離を置いていたことを強調した点は、第二次世界大戦をめぐる日本に対して厳しい批判が欧米でみられる中で、好感を与えたと考えられる。第2に、戦後、新憲法、サンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約の締結を通して、新日本を建設したという主張は吉田の外相、首相時代の業績として理解しやすいものであり、戦後の日本の復興との対比で、吉田の重要性をアピールできたと考えられる。第3に、4名の推薦者は、ノーベル平和賞の推薦資格を満たすとともに、吉田を推薦する上で最も重要な日本人政治家、法曹関係者に絞っており、よく練られた推薦状と考えられる。ノルウェー側からみて全く問題ないものであろう。なお、推薦状の日付であるが、前述の御巫による説明では推薦状の起草依頼の時期が1965年3月初めとされていたが、実際には1965年1月以前と考えられる。

次に②の吉田の経歴書は、1頁の短いものであるが、吉田の歴任した主要ポストを記している。たとえば、1928～1931年外務次官、1931年3月～1932年8月在イタリア大使、1936年9月～1938年10月在イギリス大使、1945年9月～1946年5月外務大臣、1946年5月～1947年5月、1948年10月～1952年10月首相兼外務大臣、1952年10月～1954年10月首相とある。ポストの下には、補足説明がついているものもある。外務次官のときには、「軍閥の強い反対に直面しながらも、1930年ロンドン海軍条約の批准を成功裏にもたらした」とある。1946年～1947年の首相兼外務大臣のときには、「彼の指導力の下で日本の新憲法が制定された」とある。1948年～1952年の首相兼外務大臣のときには、「1951年<sup>マ</sup>8月、サンフランシスコ講和会議への日本の首席全権として、日本との平和条約、日米安全保障条約に調印した」とある。

③の推薦理由書は、大きく戦前、戦後の2つに分けて、吉田の活動をより詳細に説明している。推薦状同様、吉田の立場をうまくまとめている。まず第1に、戦前については、日独伊三国同盟に反対し、その自由主義、反軍国主義のゆえに、軍閥から危険人物とみられ、様々な迫害を受けたとしている。1939年にイギリスから帰朝後、外務省をやめたこと、さらに1945年4月には憲兵隊により逮捕されたことに触れている。その理由として、太平洋戦争の早期終結を近衛文麿、鳩山一郎と画策したとしている。混乱が少なく終戦となったことも吉田と彼の反戦グループの事前の申し合わせによるとしている。もし頑強な軍国主義者の計画通り、最終決戦が日本本土で戦われていたならば、平和の回復が大幅に遅れ、膨大な民間の犠牲者が出ていたであろうとも述べている。

第2に、戦後については、歴史上、先例のない危機に直面した日本において、吉田は精神的、

肉体的に打ちひしがれた国民を絶望の淵から導き、日本を平和、民主主義の強国に再建しようと助けたとする。また、太平洋戦争で被害を受けたアジア諸国とも友好関係を再構築し、賠償や経済・技術援助によりアジアの平和と繁栄の促進に努力してきたことにも触れている。さらに、首相退任後も、チャーチル（Winston Churchill）、アイゼンハワー、アデナウアー（Konrad Adenauer）、ドゴール（Charles de Gaulle）ら多くの世界の主要政治家とも親密な交友を維持し、国内においても新生日本のベテラン政治家、建設者として、日本の発展に大きな役割を演じ続けていると述べている。

最後に、推薦理由書は、ノーベル平和賞受賞者がこれまで欧米に限定されていることに触れ、平和・民主主義国家への日本の再建、それによるアジア、世界平和への貢献により、吉田にアジアの政治家として平和賞が授与されるならば、「世界平和とも極めて重大に結びつくアジアの現況からみて、かなり重要な出来事となるであろう」と、その重要性を強調している。

以上のように、推薦理由書は、吉田が戦前の軍国主義とは関係ない人物であることを確認し、さらに日本、アジアの平和、繁栄に貢献していることから、アジアからの受賞者として適任であると訴えている。特に、最後に触れられたアジアからもノーベル平和賞受賞者を求めた個所は、賞のグローバル化をめざし、アジアにも関心を深めていたと考えられる1960年代のノーベル委員会の注目を惹くようにできていたと考えられる。

その他、④の史料は、1964年12月10日の1964年授賞式でヤーン・ノーベル委員会委員長がキング牧師へのノーベル平和賞授与に際して読み上げた演説の原稿である。これは、吉田の推薦にあたって参考資料として使われたものと考えられる。実際に、この史料の1頁目に手書きで「40-4-8 内海氏より返却のものを曾野局長を通じ法眼局長は〇〇入手」と2行記されている（〇〇は、判読困難）。推薦状を起草したといわれる内海丁三にこの史料は貸し出されていた可能性がある。なお、曾野局長とは曾野明情報文化局長、法眼局長とは法眼晋作欧亜局長をさすと考えられる。

⑤の1951年9月7日のサンフランシスコ講和会議における吉田演説は、いかに使われたか判断できない。推薦状の添付資料として使われた可能性も否定できない。判読が極めて難しい⑥の史料も、吉田の政治活動についての評伝であり、推薦状に添付された可能性を否定できない。

以上、外務省外交史料館で発見された吉田推薦状関連の史料を説明した。これまで知られていた吉田推薦をめぐる言説と一致する部分も多い。この資料の発見により、現時点では、1965年に吉田がノーベル平和賞に推薦されていた可能性は極めて高くなったと考えられる。今後、ノルウェー側の史料との照合により、その実態が明確になるであろう。

今後、解明すべき課題は多い。たとえば、日本側に関していえば、これまでの言説の節で説明した通り、外務省の下田武三次官らを中心に吉田の推薦運動が展開されたと考えられているが、佐藤首相、椎名外相ら政治家はこの運動にいかにかかわったのであろうか。また、吉田推薦にかかわった政治家、外交官らの意図は、いかなるものであろうか。前述の保阪正康の指摘にあるよ

うに、①「吉田への忠勤を露にすることで外務省の主流人脈をつくりあげようとの意図」、②「吉田路線を国際社会で認知させることによって、戦後日本の外交路線が正道を歩んだとの自己確認」<sup>62)</sup>は、説得力のある説明であるが、これを具体的に裏付ける証言はないのであろうか。

ノルウェー側に関していえば、ノーベル委員会は、吉田の推薦をいかに評価したのであろうか。1965年の選考では、最終的にUNICEF（国連児童基金）が受賞者に選ばれているが、1965年にはいかなる候補が推薦され、その中で吉田はいかに位置づけられたのであろうか。吉田の推薦理由書において言及されていたが、それまでアジアからノーベル平和賞受賞者が出ていない状況下で、ノーベル委員会はアジアからの候補をいかにみていたのであろうか。

## おわりに

本稿では、ノーベル平和賞候補に推薦されていた1960年の岸信介、1963年の鈴木大拙について、その選考の経緯を紹介した。また、1965年に推薦されたと考えられる吉田茂についても、外務省外交史料館の史料に基づき、現時点でわかる範囲で紹介を行なった。

第二次世界大戦後、1950年代に賀川豊彦が3回推薦され、1960年代前半にも賀川、岸、鈴木、吉田と推薦が続いたことを考えると、ノーベル平和賞の選考において日本人候補は決して珍しい存在ではなくなった。日本人が日本人を推薦するだけでなく、外国人が日本人を推薦する事例もあり、日本人候補が増えてきたのである。また、候補となった日本人の職業も多様化した。第二次世界大戦前の日本人候補を含めて考えても、それは顕著である。これまで国際法学者、実業家、社会事業家・牧師・作家が推薦されてきたが、それに加えて、政治家、仏教哲学者も推薦された。特に、1960年代に登場した政治家は新しい存在である。現役あるいは引退後の政治家がその政策によってノーベル平和賞候補として推薦されるようになった。これまで日本人の政治家は候補を推薦する側に立つことが多かった。それを考えると、ノーベル平和賞に対する政治家のより積極的なかわりがみられる。これが、アジア初の受賞者となった佐藤栄作の受賞（1974年）にもつながったと考えられる。今後、こうした変化の背景を探りつつ、1960年代の選考過程をみていく必要がある。さらに、候補となった日本人がノーベル委員会の選考においていかに評価されたかについても、ノルウェー側の史料に基づき考察する必要がある。ノルウェー側の選考意図も併せて検討することで、国際政治におけるノーベル平和賞の役割、日本の位置づけを明らかにすることができよう。

（よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授）

## 註

- 1) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦——」（1）、（2・完）（『地域政策研究』第15巻第2号、2013年1月。第15巻第4号、2013年3月）。
- 2) 拙稿「ノーベル平和賞と日本——歴代日本人受賞者・候補者が問いかけるもの——」（『世界』第837号、2012年12月）、187、193～194頁。

## ノーベル賞の国際政治学

- 3) 共同通信社による配信記事。たとえば、以下の記事を参照。「『吉田茂氏に平和賞』政府一体で推薦工作」『毎日新聞』2014年9月13日夕刊。「ノーベル平和賞へ政府工作、吉田元首相推薦状を発見」『東京新聞』同年9月13日夕刊。「『ノーベル平和賞に吉田元首相を』、佐藤栄作首相ら推薦状」『産経新聞』同年9月14日。
- 4) 岸の生涯については、たとえば以下の文献を参照。原彬久『岸信介——権勢の政治家——』（岩波新書、1995年）。
- 5) Letter from Spessard L. Holland to the Nobel Peace Prize Committee, dated 13 February 1959, PFL 1/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
- 6) 受領日は同上推薦状に手書きで記されており、これは同研究所の推薦状受領台帳でも確認できる。
- 7) Biographical Directory of the United States Congress <<http://bioguide.congress.gov/scripts/biodisplay.pl?index=h000720>>. 2014年7月25日閲覧。
- 8) *Memorial Addresses and Other Tributes in the Congress of the United States on the Life and Contributions of Spessard L. Holland, Ninety-second Congress, Second Session, Senate Document No.92-56* (Washington, D.C.: U. S. Government Printing Office, 1972), p.V.
- 9) 岸信介、矢次一夫、伊藤隆『岸信介の回想』（文藝春秋、1981年）。岸信介『岸信介回顧録——保守合同と安保改定——』（廣済堂出版、1983年）。原彬久編『岸信介証言録』（毎日新聞社、2003年）。
- 10) Letter from Spessard L. Holland to the Nobel Peace Prize Committee, dated 13 February 1959, PFL 1/1960 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1960.
- 11) 日本人がブックマンをノーベル平和賞に推薦したのは、1951年、1952年、1953年、1956年、1959年と後述の1961年の6回である。
- 12) Letter from Nobusuke Kishi to the Nobel Peace Prize Committee, dated 22 January 1961, PFL 82/1961 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1961.
- 13) フランク・ブックマン（MR Aハウス編）『世界を再造する』相馬雪香訳（MR Aハウス、1958年）、355～358頁。
- 14) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1960*, s.5, 7-11.
- 15) *Ibid.*, s.5.
- 16) *Les Prix Nobel, en 1960* (Stockholm: Royale P. A. Nortstedt & Söner, 1961), s.55. *Les Prix Nobel, en 1961* (Stockholm: Royale P. A. Nortstedt & Söner, 1962), s.56-95.
- 17) 鈴木の生涯については、たとえば以下の自伝および年譜を参照。鈴木大拙述「也風流庵自伝」（『鈴木大拙禅選集別巻 鈴木大拙の人と学問』、春秋社、1961年）、165～181頁。鈴木大拙述「私の履歴書」（日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人15』、日本経済新聞社、1984年）、383～431頁（なお、これは『日本経済新聞』1961年9月28日～10月18日に連載されたもの）。桐田清秀編「年譜」（鈴木大拙『鈴木大拙全集[増補新版]』第40巻、岩波書店、2003年）、105～264頁。桐田清秀編『鈴木大拙研究基礎資料』（財団法人松ヶ岡文庫、2005年）。
- 18) 増谷文雄「鈴木大拙論」（『在家仏教』第149号、1966年8月）、50頁。なお、同論文は以下に再録されている。松ヶ岡文庫編『鈴木大拙——没後四〇年——』（河出書房新社、2006年）、122～132頁。本稿では、初出論文から引用する。ノーベル賞について言及した増谷論文の存在については、鈴木大拙館（金沢市）の岩本明美主任研究員、猪谷聡学芸員のご教示によるものである。
- 19) 増谷、前掲「鈴木大拙論」、46、62頁。その他、論文中に増谷の「一番の親友」の宗教学者、岸本英夫が「ことし死にました」とされている。岸本は1964年1月25日に亡くなっている。このことから、講演が1964年に行なわれたことがわかる。
- 20) 「極秘 欧西第15号、昭和38年2月12日、外務大臣発在ノールウェー勝野大使宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する件」（日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』）。
- 21) 「第18号、2月21日発、22日着、勝野大使発大平大臣宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する件」（日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』）。
- 22) 「極秘 欧西第129号、昭和38年2月14日、欧亜局長発文部省調査局長宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する件」（日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』）。
- 23) 拙著『日本人は北欧から何を学んだか——日本・北欧政治関係史入門——』（新評論、2003年）、117頁。この件は、以下でも言及した。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：序説——」（『地域政策研究』第12巻第4号、2010年3月）、34頁。
- 24) Letter from Hideo Kishimoto to the Norwegian Nobel Committee, dated 23 January 1963, PFL 157/1963 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1963.
- 25) “Biographical Notes, Daisetz T. Suzuki,” Suzuki, Bilag til prisforslag 1963 (O-U).
- 26) “The Works of Daisetz T. Suzuki,” Suzuki, Bilag til prisforslag 1963 (O-U).
- 27) Christmas Humphreys, “Dr. D. T. Suzuki and Zen Buddhism in Europe,” Bilag til prisforslag 1963(O-U). Winthrop Sargeant, “Profiles, Great Simplicity,” *The New Yorker*, 31 August 1957, pp.34-53, Bilag til prisforslag 1963(O-U).
- 28) 「極秘 欧西第15号、昭和38年2月12日、外務大臣発在ノールウェー勝野大使宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する件」、 「欧西合第4478号、昭和37年12月26日、外務事務次官発文部事務次官宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する回章送付の件」（日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』）。なお、後者の外務事務次官発文部事務次官宛の連絡は、翌月文部省に届いていないことが判明し、1月16日に再発行された。それを受けて、文部省では同月17日付で全国の国、公、私大

- 学学長に連絡した。そのため、各大学に到着したのは20日すぎとなり、締め切りまで10日間しかなく、時間切れになったといわれている（「ノーベル賞に冷たいお役所」、初の依頼（平和賞）もフイ『日本経済新聞』1963年1月24日朝刊。「ノーベル平和賞推薦 結局、間に合わず」『日本経済新聞』1963年2月2日朝刊）。遅れた理由に関して、同上1月24日記事が、外務省の名誉を傷つけるものであるとして、外務省は日本経済新聞に訂正謝罪を要求している（「昭和38年1月26日、外務省曾野情報文化局長発個日本経済新聞編集局長宛、ノーベル賞に関する新聞記事について」日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』）。
- 29) 鈴木大拙「老人と小児性（遺稿）」（鈴木大拙『鈴木大拙全集[増補新版]』第20巻、岩波書店、2001年）、417頁。
- 30) 鈴木大拙『鈴木大拙全集[増補新版]』第34巻（岩波書店、2002年）、488頁。
- 31) 岸本英夫「解説」（鈴木大拙『鈴木大拙選集追巻第1巻』春秋社、1957年）、i～v頁。引用では、漢字の旧字体を新字体に改めた。
- 32) 岸本英夫「ハワイの感銘」（『春秋』第2巻第10号、1960年3月）、6頁。同エッセーは、以下に再録されている。岸本英夫「ハワイの感銘」（岸本英夫『岸本英夫集 第4巻 東西の文化』浜声社、1975年）、275～278頁。
- 33) 岸本英夫「西洋文化と鈴木大拙博士——『禪とは何か』の解説として——」（鈴木大拙『鈴木大拙・続禪選集第2巻』春秋社、1962年）、191～192頁。ハワイ大学におけるエピソードは以下でも取り上げられている。岸本英夫「年輪 鈴木大拙氏——東西文化交流の懸け橋——」（『婦人之友』第55巻第1号、1961年1月）、口絵・色刷。
- 34) Letter from Hideo Kishimoto to the Norwegian Nobel Committee, dated 23 January 1963, PFL 157/1963 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1963.
- 35) "Biographical Notes, Daisetz T. Suzuki,"Suzuki, Bilag til prisforslag 1963 (O-U).
- 36) "The Works of Daisetz T. Suzuki,"Suzuki, Bilag til prisforslag 1963 (O-U).
- 37) Christmas Humphreys, "Dr. D. T. Suzuki and Zen Buddhism in Europe," Bilag til prisforslag 1963(O-U). Winthrop Sargeant, "Profiles, Great Simplicity," *The New Yorker*, 31 August 1957, pp.34-53, Bilag til prisforslag 1963(O-U). 前者については、出典が明記されていないが、以下のものと同じである。Christmas Humphreys, "Dr. D. T. Suzuki and Zen Buddhism in Europe,"（鈴木大拙博士頌寿記念会編『仏教と文化—鈴木大拙博士頌寿記念論文集—』鈴木学術財団、1960年）、1～8頁。後者は、以下に抄訳がある。ウィンスロップ・サージェント「鈴木大拙の横顔」渋谷ふさを抄訳（臨済会編『禅のある人生』春秋社、1970年）、116～120頁。
- 38) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1963*, s. 7-19.
- 39) *Ibid.*, s.5.
- 40) 吉田の経歴については、たとえば以下を参照。原彬久『吉田茂——尊皇の政治家——』（岩波新書、2005年）。高坂正堯編『吉田茂——その背景と遺産——』（TBSブリタニカ、1982年）。高坂正堯『宰相 吉田茂』（中央公論新社、2006年。原著は1968年刊行）。
- 41) 加瀬俊一「＜インタビュー＞ノーベル平和賞の舞台裏」（『自由』第16巻第12号、1974年12月）、39～40頁。
- 42) 鹿島建設株式会社編『鹿島守之助——その思想と行動——』（鹿島出版会、1977年）、805～806頁。
- 43) 同上、813～814頁。
- 44) E・ライシャワー「核のカサとノーベル平和賞」（『中央公論』1974年12月）、38頁。
- 45) 御巫清尚（1921～1998年）は、1963年に吉田の世話係になった後も、外務省のアジア局賠償部調整課長、経済協力局国際協力課長、同政策課長を兼務しており、1967年夏に世話係を後任に引き継いだが、吉田が急逝し、国葬まで手伝うことになった。吉田の晩年の約4年間、吉田の傍にいたことになる。その後、御巫は、経済協力局長、在フィリピン大使、在カナダ大使、在韓国大使を歴任し、1987年に退官している。
- 46) 御巫清尚「晩年の吉田茂氏」（財団法人吉田茂記念事業財団編『人間 吉田茂』中央公論社、1991年）、590～591頁。
- 47) 「三月始めに」とあるが、ノーベル平和賞の締切は「2月1日」であり、実際はこれよりも早くに起草依頼があったと考えられる。
- 48) 内海丁三（1897～1973年）は、大阪朝日新聞の記者の後、第二次世界大戦後は時事新報の論説委員、編集局長、主幹を歴任。また、駒澤大学教授、産業経済新聞の論説委員、NHK解説委員も務めた。1973年3月に死去した際、佐藤栄作元首相が告別式に参列したとの記録もあり（伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第5巻、朝日新聞社、1997年、314頁）、佐藤ら政治家とも縁が深かったことがわかる。
- 49) 高坂がこの件のゴーストライターであったことは、以下にも指摘がある。中西寛『『宰相吉田茂』の魅力』（高坂、前掲『宰相 吉田茂』）、10～11頁。
- 50) Shigeru Yoshida, "Japan's Decisive Century," *Britannica Book of the Year 1967* (Chicago: Encyclopædia Britannica, Inc., 1967), pp.17-48. 邦訳は以下の通り。吉田茂『日本を決定した百年』（日本経済新聞社、1967年）。
- 51) 御巫は、新任の在ノルウェー日本大使を「勝野康助大使」としているが、「須山達夫大使」の誤りと考えられる。勝野は、1962年～1966年に在ノルウェー日本大使を務めた。後任の須山は、1966年～1969年に同大使を務めた。
- 52) 下田武三の回想録に、吉田のノーベル平和賞推薦について言及はない。下田武三、永野信利『戦後日本外交の証言——日本はこうして再生した——』上・下（行政問題研究所、1984、1985年）。下田事務次官の任期は1965年6月29日～1967年4月14日である。そのため、下田は1966年、1967年の推薦で中心的役割を演じたと考えられる。下田の前任の次官は黄田多喜夫（任期1964年5月15日～1965年6月29日）、後任の次官は牛場信彦（任期1967年4月14日～1970年7月10日）であった。人事情報については、以下を参照した。秦郁彦編『世界諸国の制度・組織・人事 1840-1987』（東

## ノーベル賞の国際政治学

- 京大学出版会、1988年)。
- 53) 保阪正康『吉田茂という逆説』(中央公論新社、2000年)、435頁。
- 54) 同上、435頁。
- 55) Letter from Eisaku Sato, Etsusaburo Shiina, Kisaburo Yokota and Shigeru Kuriyama to President of the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 26 January 1965.
- 56) Shigeru Yoshida, Biographical Notes.
- 57) Reasons for Recommendation.
- 58) Gunnar Jahn: Speech in the Oslo University Festival Hall, on the Occasion of the Presentation of the 1964 Nobel Peace Prize.
- 59) Eighth Plenary Session, Opera House, 8. p.m., September 7, 1951.
- 60) 全体の表題なし。4部構成の各章表題は以下の通り。なお、マイクロフィルムでは、極めて判読困難な状態にある。1. Shigeru Yoshida, the Man, His Passion for Peace. 2. Peace Constitution and Shigeru Yoshida—He Mapped Out the Route for New Japan—. 3. Rearmament of Japan and Shigeru Yoshida—He Chose the Security Treaty between Japan and the United States of America—. 4. Post Economic Rehabilitation and Shigeru Yoshida—He Lead the Foundation for Japan's Economic Reconstruction—.
- 61) 1965年推薦状において推薦者となった横田、栗山、さらに前述の御巫の証言に登場した高柳賢三、江川英文らに対して、1963年12月に外務省事務次官(江川英文宛のみ欧亜局長)からノーベル平和賞候補推薦に関する回状が送付された記録が外務省のファイルに残っている。回状とは、ノーベル委員会が関係者にノーベル平和賞候補の推薦を依頼したもので、推薦資格、推薦締め切りなどが記されている。1965年の推薦に直結しないが、その前年分から外務省がノーベル平和賞推薦有資格者である関係者にノーベル平和賞についての情報提供を行っていたことは重要であろう。「欧西合第3973号、昭和38年12月23日、事務次官発横田喜三郎宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する回状送付の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』)。1963年12月時点の事務次官は島重信(任期1963年1月18日～1964年5月15日)、欧亜局長は法眼晋作(任期1961年2月17日～1965年3月9日)であった。
- 62) 保阪、前掲『吉田茂という逆説』、435頁。

### 付記

ノルウェー・ノーベル研究所での調査では、多くの研究所スタッフに大変お世話になった。また、国内の調査では、金沢市の鈴木大拙館主任研究員の岩本明美氏、学芸員の猪谷聡氏にお世話になった。吉田茂の推薦状に関しては、共同通信社生活報道部の市川亨氏から多大なご支援を賜った。ここにお名前を記し、お礼申し上げます。

本稿は、2013年度・2014年度高崎経済大学研究費による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。